

今よみ

農業
政治
経済

学校で学ぶ農作業安全

特別編集委員
山田 優

アイルランドのダブリン大学で農学を専攻する学生は、3年生になると半年間の農作業安全の講義をみっちり勉強する。授業に出席し試験に合格しなければ、4年生に進めないからだ。

授業は教科書に基づいた座学の他、農家を訪ねる現地実習や農作業事故を体験した農家が教壇に立つこともある。農作業安全のための法規制や農業機械、家畜の取り扱い注意点、農場のリスク管理の方法など幅広い分野を学ぶ。

同大学で教えているシネッド・フラネリー講師は「国内のほとんどの農学部で農作業安全は必修科目。アイルランドの農学部を卒業し、就職や就農するに

体系的な教育機会を

は最低限の知識を学んでもらうのが当然」と話す。4年制大学以外では、各地にある実践的な教育を特徴とする農業大学校でも農作業安全は必修科目だ。

△ ▽

日本ではどうか。

昨年10月に、一緒に現地調査した宇都宮大学教授の田村孝浩さんによると「残念ながら、日本の高等教育の中で体系的に農作業安全を教える講義は少ない」。

多くの大学農学部や農業大学校の学生が、毎年300人近い命を奪う農作業事故の実態や原因、リスク管理などを学ぶ機会がないまま現場に出ているのがこの国の現状だ。

△ ▽

先日、農作業安全を共同研究している大学教授らの打ち合わせが

宇都宮大学で開かれた。安全対策で日本の先を行くアイルランドに少しでも追い付くため、研究者、あるいは教育者として何ができるのか。そんな中で浮かんできたのが「日本で農作業安全の教科書をつくる」構想だ。

アイルランドから持ち帰った200頁余りの教科書を前に語り合った。専門家が手分けをすれば、日本の実情に合った教科書づくりは難しくなさそうだ。しかし、その教科書が役立つためには、農作業安全の科目を全国の大学や大学校の授業に組み込んでもらうことが必要だ。

教科書づくりと並行して、日本の高等農業教育を担う人たちに対して、農作業安全の大切さを働きかけていくことが大切になるだろう。

(毎週火曜日付)